

“チェコの宝物”である音楽を通じ、日本とチェコ共和国両国の相互理解を深めることを目的とするチェコ音楽コンクールが、3年ぶりに開催されました。過去の入賞者はその後日本音楽コンクールなどでも活躍している、幅広い世代の登竜門です。審査に当たった上田弘子さんがその様子をレポートします。

取材・文・写真——上田弘子



ピアノ部門・一般の部 第1位の田中琴さん
(写真右)と恩師の岡本美智子先生

チェコ音楽コンクール 2022

コロナ禍のため3年ぶりの開催。
その“時間”がコンクールを成熟させた

参加者の自己理解による 楽しさと学びに満ちた競演

「チェコの音楽作品の魅力を広く知ってもらえたら」、「音楽を通じた国際交流」。それが形となったのが、2003年に第1回が開催されたチェコ音楽コンクールである（ヴァイオリン、声楽、ピアノの3部門）。ピアノ部門は一時期中断されていたが、2018年に再開し、2019年にはジュニアの部が新設された。筆者は2019年のピアノ部門の審査に携わったのだが、新設されたジュニアの部（小中学生）では朴沙彩（当時中学1年生）、一般の部（高校生以上、上限なし）では谷昂登（当時高校1年生）が優勝し、全体的にもレベルが高く驚いた。

「レベルが高い」というのは、いわゆる高難度の曲をバリバリ弾くという意味ではなく、参加者それぞれが自身に適した選曲と表現のため、審査をしながら聴く楽しさや学びがあったのだ。一般の部は参加年齢の上限がないため、レスナーや社会人、再び勉強を始めた人やピアノ愛好家など、様々なバックグラウンドの人

の演奏は興味深く、感銘の連続で聴き入った。

コロナ禍の影響で3年ぶりの開催となった2022年。今回も審査員のオファーを受けたのだが、コンクールの成長を実感した年だった。課題曲はチェコの作曲家であるドヴォルジャーク、スメタナ、ヤナーチェクの作品で、それに自由曲を組み合わせた構成。ピアノ界でのチェコ作品は少々縁遠いところ、参加者たちの選曲・構成の上手さと豊かな表現力には感心した。

第1位はドヴォルジャークを 演奏した田中琴さん

本選（2022年10月12日・駐日チェコ共和国大使館）の結果、一般の部／第1位・田中琴（桐朋学園大院2年）、第2位・大林療和（桐朋学園大4年）、第3位・斎藤桃（国立音大院1年）、小林七菜（桐朋学園大1年）、ジュニアの部／第1位・中尾有沙（台東区立上野中2年）、第2位・竹下怜（上野学園中3年）、第3位・坂口純音（仙台白百合学園中3年）、という結果になった。

田中（一般・1位）は舞台での強さがあり、良く通る良質の音質で、特にドヴォルジャーク《フリアント舞曲》は魅力的だった。大林（一般・2位）のスメタナ《オヴェス》など貪欲な表現力を感じたのだが、そのヴィジョンが整理されるとグッと伸びると感じた。中尾（Jr. 1位）はドヴォルジャーク《フリアント舞曲》の可憐なリズム感が印象深く、竹下（Jr. 2位）はドヴォルジャーク《パツカナル》での美音、坂口（Jr. 3位）は色彩豊かなドヴォルジャーク《戯れに》を好演。

11月22日には再び駐日チェコ共和国大使館にて、表彰式と優勝者による披露コンサートが行われた。大使館内にはチェコの画家ミュシャの作品や、大相撲で優勝力士に授与されるボヘミアガラス製の友好杯が飾られており、また表彰状には洋画家の垣内宣子がスメタナ・ホールを描いた絵が使われるなど、チェコ文化に触れられることも当コンクールの特長と言える。

最後になったが、ヴァイオリン部門は西川奈那（一般／桐朋女子高音楽科2年）、的場桃（Jr.／青山学院中3年）、声楽部門は山崎花香（洗足学園音大院修了）が第1位となった。